

【C-3】

社会を生き抜くための人文学

ー 「フランス」 を用いたケースメソッドの可能性 ー

2018 年 12 月 8 日 (土) 13:45 - 15:15

神田外語大学 8号館116教室

「その勉強って何の役に立つの?」人文学部出身の人は、一度はこんな問いを投げかけられたことがあるはずです。文学、言語学、社会学…人文学は「社会の役に立たない」というレッテルを貼られてしまうことがよくあります。ですが、それは間違いです。人文学は社会の中で生きる個人のあり方を問うものであり、極めて実用的な学問です。本ワークショップでは「フランス文化」の知見に基づき、具体的な社会問題の解決を討議することで、人文学を社会で役立たせる手法を学びます。人文学を武器に社会へ飛び立てることを学生に伝えてみませんか?

フランス・ケースメソッド研究会 (あずにゃんプロジェクト)

高橋 梓 (近畿大学)、松井 真之介 (神戸大学)、山川 清太郎 (京都学園大学)

本日の配布資料は以下の通りです。

- | | |
|------------------------|-----|
| ■ 表紙 (この用紙) | 1 枚 |
| ■ 本格中華料理店・光宮のハラスメント被害 | 5 枚 |
| ■ ワークシート 1 (ケースの要約) | 1 枚 |
| ■ ワークシート 2 (フランスレクチャー) | 1 枚 |
| ■ ワークシート 3 (個人→グループ共有) | 1 枚 |
| ■ リフレクションペーパー | 1 枚 |

本格中華料理店・光宮のハラスメント被害

橋本圭介 (27) は憂鬱な気持ちで職場の扉を開けた。連日の残業の疲れが取れていない。しかし、そんな弱音を吐ける状況ではない。橋本の負担など、後輩の柴田智也 (23) に比べたらはるかにましだからだ。柴田は今日出てくるのだろうか。

中華料理店・光宮(こうきゅう)は、本格的な中華料理を安価で提供する地元の有名店だ。地方全域に広がる外食チェーン店「はたけやま」の顔とも言うべき老舗である。以前ほどの賑わいはないにせよ、地元民に愛されたレストランである。

橋本はその地方の大学に通っていた。学生時代に半年間フランスに留学する機会があり、そこでカフェやレストランに通ううちに世界中の食生活に溶け込む中華料理に強い関心を抱くようになった。そんな経験から地元の有名企業である「はたけやま」への就職を志願したところ、幸運にも営業としての採用が決まったのだ。その研修先が有名店の光宮であった。橋本は期待に胸を膨らませて研修に挑んだが、その気持ちは一気に不安へと変わった。

研修初日、先輩社員の岸田の指揮の下、アルバイトの学生たちと一緒に勤務を開始した日のことである。厨房から怒鳴り声が聞こえてきた。アルバイトの男子学生が、料理長の中西に怒鳴られているのだ。光宮は「はたけやまグループ」の店だが、元々は料理長の中西が始めた個人店であった。中西の役職は株式会社的には部長であるが、実質はオーナーであり、親会社の社長である畑山であっても頭が上がらない。いわば光宮のドンである中西が、男子学生を怒鳴りつけているのだ。「まったく・・・大学生は使えない！常識がないんだよ！」ものすごい剣幕の怒りを目の当たりにして、橋本は岸田に理由を尋ねた。

岸田「あのバイトが皿を洗おうとして出したときの水の量が足りなかったみたいだね」

そんな理由で？皿洗いの水の量が少ないだけで？そこまで怒るようなことか？

次の日も、その次の日も男子学生は些細なことで怒鳴られ続けていた。

研修後、橋本は「はたけやまグループ」のチェーン店である安価なラーメン屋「チャイナボーイ」で四年間勤務した。チャイナボーイは有名デパートの地下にあり、忙しい職場であったが、店長やバイトとの関係は良好であり、光宮の雰囲気とはまるで違っていた。会社から支給される給料は手取りで20万ほどだったが、ボーナスも出る。シフトはデパートの営業時間に基づいているため、労働時間も常識的なものであった。この四年の間に橋本は結婚して一児の父となり、公私ともに順風満帆な日々を送っていた。そんな中、橋本は光宮への異動を告げられた。中西の元で働く——橋本はじわじわと不安がわき上がるのを感じた。

光宮への異動が決まり、橋本は勤務前に先輩の岸田のフォローを受けながら、営業部の若手としてホールでの接客と学生アルバイトの管理を担当することとなった。しかし橋本は

勤務表を見て驚いた。研修の頃には十名ほどいた学生バイトが今は四名しかいないのだ。

橋本「岸田さん、バイトはこれだけなんですか？」

岸田「うち、すぐやめちゃうんだよね」

橋本「なら、このバイトだっていつまで持つかわからないですよ」

岸田「いや、この子たち意外と長いんだよ。みんな二年くらい働いているんじゃないかな」

橋本「二年も！すごいですね。学生なのに、根性あるなあ」

素直に驚く橋本に、岸田は複雑な表情でこう返した。

岸田「今のターゲットは柴田君だからね。バイトはやりやすいんだよ」

柴田は勤務二年目の正社員だ。柴田は勤務初年度から光宮で働いているので、橋本はまだ会ったことがない。そして岸田によると、今の中西の「ターゲット」は柴田らしいのだ。

地元の出身で、近隣の公立大を卒業した柴田は、そのまま地元の光宮に就職した。家庭の事情で県外に出るという選択肢を持つことができず、奨学金を借りながら大学を卒業したらしい。しかも今は両親の体調がよくないこともあり、実家暮らしを続けているそうだ。

勤務初日の朝、橋本は店舗裏のロッカールームで柴田と会い、挨拶を交わして自己紹介をした。細身で長身の柴田は、どこにでもいる普通の若者といった印象だ。だが表情が暗く、口数も少ない。着替えの最中もほとんど口をきかず、そのまま厨房からホールへと消えていった。そしてその日、柴田は何度も中西に怒鳴られていた――

柴田が「ターゲット」になったのは実に些細なことであつたらしい。その前の「ターゲット」だった男子学生が辞めてしまい、しばらくは職場に平和な空気が漂っていた。そんな折に勤務を始めた柴田に不運が襲った。ホールで注文を取る作業が一段落し、柴田が厨房の掃除を手伝い始めたときである。

中西「その皿を拭いておいて」

柴田は目の前の布巾で皿を拭き始めた。それを見た中西の声のトーンが急に変わる。

中西「あ？お前、何使ってるんだ？」

柴田が手にしていたのは普通の布巾である。しかし、その布巾は厨房のまな板の隣に畳んであつた布巾であつた。それは厨房の作業中に使用するものなのだ。

中西「それは厨房で使うものだろ？皿を拭く布巾はそっちにあるんだよ！」

急に怒鳴り出す中西を見て、柴田はうろたえた。柴田はただ単にその布巾を厨房で使うことを知らなかったのだ。知っていたら当然所定の布巾を使うだろう。

中西「まったく、常識がねえな！お前、大卒だってな。だいたい大学なんてのはな、やることのない人間がいくところなんだよ。俺はこの仕事をやっているから大学なんて必要ないんだよ。お前みたいな人間がいるから世の中がおかしくなるんだ！そう思うだろ！？」

いきなりの剣幕に、柴田は何も言い返せぬまま立っていたら、中西はこう言い残した。

中西「お前も使えないやつだな」

そしてこの日から柴田が新たな「ターゲット」となった――

橋本は歳が近い先輩社員の佐々木から柴田のこの顛末を聞いた。布巾を間違えて使ったくらいで怒鳴り散らし、仕事と無関係な部分にまで口を出し、全人格を否定する。研修中に橋本が目にした光景とまったく同じだった。

これではアルバイトが居着くわけもない。だが、今いるアルバイトにとって「幸運」なのは、中西の矛先が社員の柴田に向かっていることだ。自分たちに矛先が向かない限り、客数が減っている光宮のアルバイトはさほど大変なものではない。

初勤務から一ヶ月、橋本は柴田が怒鳴られる様子を何度となく目にするようになった。人間は萎縮すると、行動に余裕がなくなり、全てに迷いが生じて動きが遅くなる。客にお茶を一つ出すのも、分量はどうするべきか、持って行くタイミングはどうするべきか、お盆の真ん中に乗せればいいのか、そもそもお盆を使っているのか……。そこで行動が遅くなったことがまた中西の逆鱗に触れ、厨房から怒鳴り声が飛ぶ悪循環に入る。

中西「お前みたいなやつは社会のどこでも使えないぞ！なあ、みんなそう思わないか？」

中西はこのように周りの人間に同意を求め、巻き込んでいく。中西の下で働く調理師の武藤と林は、職人の流儀で「親方」が言うことにうなづくしかない。また、先輩社員の岸田や佐々木も、巻き添えを食らわぬように笑ってごまかす。橋本自身も、「こいつ、どうすればいいと思う？なあ、橋本！」などと振られ、その度に曖昧な笑みを浮かべるしかできない。

たちが悪いのは、それをアルバイトの学生にも強要することである。女子のアルバイトの前で柴田をなじりながら、「君たちの方が使えるね」「こんな社会人になっちゃ駄目だぞ」と言い放つ光景も珍しくない。柴田のプライドが切り裂かれる一方で、若い大学生たちは自分たちが「役立つ存在」であると告げられるのだ。彼らは中西の言葉を真に受け、柴田を見下している。つまり光宮は「一人が犠牲になれば比較的平和な職場」なのである。

アルバイトが減少した光宮ではシフトが追いつかず、柴田はもちろん、橋本、佐々木、岸田ら社員も積極的にホールに出て、注文やレジ打ち、終了後の清掃も行わなければならない。中西ら料調理師たちは翌日の仕込みを終えると帰宅するが、社員は通常の事務仕事が深夜まで食い込んでしまう。子育ては妻に任せきりになり、家族のストレスもたまっている。

だが、柴田の心労はいかばかりだろうか。中西のパワーハラスメントを連日のように受け、余裕のない生活を深夜まで続けている。中西たちが帰ったあとであっても、柴田は余裕を取り戻せず、些細な作業でミスが続き、仕事は長引くばかりだ。

普通に考えると、辞めるという選択肢もある。だが中西は逃げ道を潰すように、「ここで通用しなかったら社会のどこでも通用しない」「他の店はこんなものではない」など、柴田

の自信を打ち砕いていく。そもそも、少ないとはいえ正社員としての給料もボーナスも支給され、待遇はそれなりだ。柴田の家族にとっても光宮での稼ぎは欠かすことができない。

つかの間の休憩中、二人だけになったロッカールームで橋本は柴田に話しかけた。

橋本「柴田君…大丈夫？毎日こんな感じで」

柴田「いえ、仕事がもらえているだけでも……僕要領悪くて…いつもすみません」

橋本「いや、柴田君が悪いわけじゃなくてね……」

話が途切れ表情が消えてしまった柴田の顔を見ると、橋本は胸が苦しくなった。理由なく怒鳴られ、萎縮して失敗してはまた怒鳴られてしまう環境に身を置いているだけである。

柴田は悪くない。でもそう心で思っているだけではどうしようもない。このままでは柴田が潰される。もう手遅れかもしれない。なら精神を壊す前に辞めてしまえばいい——そこまで考えて、橋本は恐怖を覚えた。柴田が辞めたら次の「ターゲット」は柴田の次に若い自分ではないか？自分が柴田の立場になったら？「仕事を辞める」などできるか？子供も小さく貯金も少ない。家族は俺の給料を当てにしている。悪いのは中西なのに、なぜ自分がやめなきゃいけない？この店をボロボロにしたのは、ふんぞり返っている国王・中西ではないか？

中西をどうにかしなければいけない——だがどうする？先輩社員の岸田と佐々木は中西の性格をわかっており、内心困っていることだろう。だが年齢は中西が上である。役職は中西が部長であり、岸田も営業の部長、佐々木は係長だ。社長の畑山はたまに店に来るが、年齢は中西より下である。二代目の社長である畑山は岸田よりも若く、佐々木とさほど変わらない。先代の畑山社長が中西の個人店を光宮の系列にする代わりに三顧の礼で迎えたため、中西は二代目の畑山社長に対しても横柄な態度を取る。だが、光宮に働きかけるためには、この三人の社員と協力しなければ始まらない。

厨房はどうだろうか。調理師の武藤と林はともに四十年配で、役職は課長である。中西への反感はあるだろうが、仕事が終われば一緒に飲みに行くなど、プライベートでも交流はあるようだ。アルバイトの四名は仕事以外で社員と特に交流はない。

かつての人気店・光宮は、もはやパワーハラスメントが吹き荒れ、長時間労働を強いられるブラック企業になってしまった。「この状況を改善しなければならない」橋本が決意したそのとき、ふいに脳裏にフランス留学中に受けた講義の記憶が甦った——

問 1 ケースを読み、「ワークシート 1 ケースの要約」を簡潔に埋めてください。

問 2 橋本はフランス文化に関する専門知識を利用して光宮の職場環境を改善しようと考えています。あなたが橋本なら、どんな順番で、誰と協力し、どのような方法で職場環境を改善するか検討してください。

登場人物表

橋本 (25)	社員 (営業)
柴田 (23)	中西の「ターゲット」。社員 (営業)
佐々木 (32)	営業係長。
岸田 (55)	営業部長
畑山 (36)	外食チェーン「はたけやま」社長。二代目。
中西 (64)	料理長。役職は部長。
武藤 (43)	調理師。課長。
林 (41)	調理師。課長。
その他 (学生アルバイト)	
吉川 (21)	男子。バイトリーダー。大学3年生。
和田 (20)	男子。アルバイト。大学2年生。
斎藤 (19)	女子。アルバイト。大学2年生。
木村 (19)	女子。アルバイト。大学2年生。

ワークシート 3 個人→グループ共有

	STEP 1	STEP 2	STEP 3
	レクチャーで最も重要なことは？	問題にどのような対応ができるか？	対応の具体案は？
社会レクチャー (松井)			
言語レクチャー (山川)			
文学レクチャー (高橋)			

グループ _____ メンバー _____

リフレクションペーパー

1. リフレクション

⇒ ご参加ありがとうございました。本日のワークで上手くできたこと、できなかったことを記入してください。

2. 明日に繋げるために

⇒ 今回のワークショップの経験をあなたは実生活にどう役立てますか。

3. 今回のワークショップに参加したご感想をお聞かせください。

所属_____

氏名_____

フランスで橋本君が受けた講義 A

講義名: Civilisation (シヴィリザシオン:主に留学生が受講するフランス社会文化論)

テーマ: フランス革命と市民の権利

【概要】

国王とそれを支えるカトリック教会から「市民」が権力を奪取したフランス革命について、この回では特に革命以降のフランスにおける市民の「権利」と「連帯」について学ぶ。

【橋本君が思い出したこの講義のポイントメモ】

- ・現在のフランス共和国を成立させる契機となったフランス革命は、団結した「市民」たちが国王から国家の権力を奪い取って、市民が権力の主体になることに意義があるという点。
 - ・そのスローガンが有名な「liberté 自由・égalité 平等・fraternité 友愛」である。
 - ・フランス人はフランス革命で国王から権力を奪取したことをとても誇りに思っている。
 - ・フランス人は公教育においてフランス革命とその理念を丁寧に学び、それを実践する。しかし、どう実践するのか？
- フランス人は社会の「理不尽」に対して、「市民」という単位で集団で異議を唱える、という実践が見られる。

特に労働環境における「理不尽」に対してはアグレッシブに対抗するという伝統がある。

- ・「マニフ manifestation」=デモ、と「グレーヴ grève」=ストライキ の国
- ・公務員、公共交通機関も頻繁に、容赦なくストを起こす
- ・迷惑を被るはずの市民はむしろストに寛容で、ストを応援する。ライドシェアで交通は乗り切る！
- ・パワハラは(個人経営のレストランなどの)閉鎖的環境でない限り、一気に拡散され、社会問題となり糾弾される。

- その実践=対抗の方法が「連帯 solidarité」である。

profに見せてもらった

- ・エールフランスのスト
- ・労働総同盟(CGT)の大規模マニフ
- ・アルメニア人ジェノサイド認知のマニフ の写真

● 連帯の根底には「平等な市民」という意識がある。＝平等な市民による連帯

- ・ 立場が一緒の「平等な市民」が、立場の違うもの(＝経営者、国家など)に対して意義を申し立てる。
- ・ 理不尽を被ったものに対して、平等な市民として立場を「共有」する。
- ・ 一見反抗的だが、それがフランス的に理不尽でないと判断されれば、上意下達のシステムは問題なく機能する。

結論 1 社会の「理不尽」には立場を共有した「市民の連帯」、つまり権力への異議申し立てで正面突破できる!

ただ、

疑問① 市民は本当に平等でフラットなのか?

疑問② 逆に平等が行き過ぎて平等ファシズムにならない?

① 実際にはさまざまな「属性」＝「それぞれの立場」がある。

- ・ 例えば宗教、地域、人種、民族、ジェンダーなどの属性がある
- ・ しかし、その属性(立場)は、

● 公の場ではおおびらに主張してはいけない＝「フランス人」「一個人」として平等!という考えがフランスの基本!

② フランスで属性を主張するには、フランスの考え方＝共和主義に則った／抵触しない理屈が必要!

<例> 地域語学校、アルメニア学校、イスラーム学校の成立様式

- ・ 地域語学校は地域語とフランス語の「バイリンガル学校」
- ・ アルメニア学校も民族学校ではなく、アルメニア語とフランス語の「バイリンガル学校」
- ・ イスラーム学校はイスラーム教育を「オプションで」含む一般の私立学校
- ・ これらは「フランスの教育プログラムに従う、あらゆる子弟に開かれた一般の私立学校」
- ・ 実際は属性に属する子弟が大半だが、「〇〇人」「〇〇教徒」のためだけに開かれた学校ではない!

結論 2 正面突破を避けつつ、原則をうまく「すり抜ける」理屈と戦略を持って運営されている!

フランスで橋本君が受けた講義 B

講義名：社会言語学

テーマ：強い言語と弱い言語、多言語主義と複言語主義

【概要】

世界では約 5,000 の言語が用いられており、ひとつの国・地域で複数の言語が用いられている例が大半である。しかしながら、その言語使用が様々な社会問題を生み出している。

【橋本君が思い出した講義中の重要箇所】

多くの国では母語以外に「外国語」として複数の言語を学ぶ。例えばフランスでは中学校からドイツ語、英語、アラビア語、中国語、日本語などを学ぶことができる。

自分（橋本君）の母国である日本では、近年、小学校での「外国語教育」が議論されている。しかしながら「外国語」は英語に限られており、大学入試でもセンター試験外国語科目は「英語」を受験する人が圧倒的多数である。果たしてこのような「外国語＝英語」という図式の外国語教育は良いのだろうか？そして、私たちは疑うことなく、この図式を鵜呑みにしていないだろうか？そこには「英語を頂点とした無自覚なヒエラルキー」が存在すると考えられる。

フランスではフランス語以外に、ブルトン語（北西部）、アルザス語（ドイツ国境付近）、コルシカ語（コルシカ島）など、さまざまな「地域言語」が存在する。しかしながら、フランスの公用語はフランス共和国憲法第 2 条 « La langue de la République est le français. » によってフランス語と定められている。この憲法の元になったのは、司法や行政の場でフランス語を用いることを定めた 1539 年フランソワ 1 世による「ヴィレル＝コトレ勅令」であるが、今から 500 年前の話であり、現在、フランスは様々な移民を受け入れ「多民族国家」の様相を見せている。フランスの公用語がフランス語だけで良いのだろうか？ここではフランス国内における「フランス語を頂点とした無自覚なヒエラルキー

一」が存在するのではないだろうか？

このような問題を解決するには「無自覚な暴力」をやめること、つまり「ヒエラルキーの平坦化」である。その方法として「多言語主義」と「複言語主義」を考えると良い。

- 多言語主義…一つの地理的地域に二つ以上の言語変種が存在する状況の中で、その社会レベルの言語的多様性を尊重・促進していくこと
- 複言語主義…一人の人間の中に複数の言語能力があり、現実の場において必要に応じて言語を切り替えながら社会的な課題を解決する状態

つまり、多言語主義の観点では、「同じ国に住む人の多様性を尊重することが必要」であり、複言語主義では「様々な価値観を認め、必要に応じて臨機応変に対応する能力が必要」なのではないか。

権威的な言語が力を発揮する中で個人はどうすればよいのか？多言語主義と複言語主義の立場から、

- 多言語主義が尊重される社会をつくる…ブログ・SNS 投稿、デモ、政治家への陳情などで社会に訴える。
- 言語多様性に対応する能力を持つ…自らが複数の言語を習得し、必要に応じて臨機応変に対応する。

などを考えることができる。

フランスで橋本君が受けた講義 C

教員名：A. DUPONT

講義名：フランス文学概論

テーマ：マルセル・プルースト（1871-1922）の『失われた時を求めて』に見る社会学的テーマについて

【概要】

プルーストの代表作『失われた時を求めて』は、19世紀～20世紀のフランスを舞台として、小説家を目指す「私」の人生が綴られる。主人公「私」はパリの裕福な家庭に生まれ、サロン（夜会）で貴族社会の凋落やブルジョワジーの躍進を目にする。

【講義中の分析箇所】

幼い頃、パリ近郊の田舎町コンブレーで復活祭の休暇を過ごす主人公「私」は、貴族階級のゲルマント公爵夫人に強い憧れを抱いている。教会のタペストリーに描かれた神話上の人物にゲルマント公爵夫人を重ね、一目会いたいという思いを強くする。だが、とある結婚式のミサで本物のゲルマント公爵夫人を目にすると、「私」の憧れは霧散し、幻滅を感じるのだった。

<第一篇、『スワン家の方へ』>

私たちは皆、私がどうしても行きたかった散歩道の終着点、つまりゲルマントまで足を伸ばすことはなかった。私はそこに、館の住人たち、つまりゲルマント公爵夫妻が住んでいることを知っていた。ゲルマント夫妻が実在の人物であることは知っていたが、彼らのことを考える時にいつも私が思い浮かべるのは、教会にある「エステルの戴冠式」の中のゲルマント伯爵夫人のように、タペストリーに描かれた人としてである。（RTP, I. 169）

⇒ ゲルマント公爵夫人＝エステル（旧約聖書「エステル書」）

※ コンブレーの「エステル」のタペストリーはゲルマント家の祖先であるゲルマント伯爵夫人をモデルにしていると言われている。

結婚式のミサの最中に、突然、守衛が身体を動かした拍子に、礼拝堂に腰掛けているブロンドの婦人が目に映った。大きな鼻で、鋭く青い目をしている。首に巻いた絹のスクーフはモーヴ色で、なめらかで新しく輝いているが、鼻の脇に小さなできものがあった。[…]ゲルマント夫人の肖像写真にそっくりで、夫人がやってくるまさにその日に礼拝堂にいるのだから、この人はゲルマント夫人に違いない！私の失望は大きかった。（RTP, I. 172）

⇒ 実際のゲルマント夫人を目にすることでの失望

【プルーストの社会学的読解】

- 異なる社会階層.....自分とは別世界
- 自分の世界と異世界の間横たわる「心理的距離」
- 「距離」が対象を神話化し、幻想を発生・持続させる。
- 現実を知る→神話の崩壊→失望 ※距離の消失

<イメージ>

(例) 片思い中に意中の相手をあれこれと神格化するが、実際に付き合ってみると失望した。

(例) 部活の監督に畏怖を覚え、理不尽な指示に意味があると思って耐えていたが、自分がその立場になってみたら気まぐれで言っていただけだということに気づいた。

【まとめ】

『失われた時を求めて』を「幻想」と「現実」の差異を知った主人公が「現実」に立ち向かう術を模索する物語として再解釈することができる。社会的地位の格差による心理的距離によってもたらされる畏怖の念は「幻想」であり、相手をよく知ることで解消されるものである。

【使用テキスト】

Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, tome 1, édition publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1987. 引用に際しては *RTP*, I. という略号を使用し、ページ数を付した。

【参考文献】 ※本テーマをもっと知りたい人のために

Pierre-V. Zima, *Le Désir du mythe. Une sociologique de Marcel Proust*, Nizet, 1973.

阿部宏慈、『プルースト 距離の詩学』、平凡社、1993年。